

2006年5月30日

財団法人 大学セミナー・ハウス  
理事長 中嶋嶺雄 様  
館長 荻上統一

DOCOMOMO Japan 代表  
鈴木博之

### 大学セミナー・ハウスの保存に関する要望書

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

本会は、20世紀の建築遺産の価値を認め、その保存を提唱することを目的のひとつとする国際的な非政府組織（NGO）である DOCOMOMO の日本支部です。

東京都八王子市に所在する貴財団の建物「大学セミナー・ハウス」につきましては、すでに、日本建築学会長名でご通知が届いているかと思いますが、1999年、日本建築学会の歴史・意匠委員会の下に組織された選定委員会によって、日本を代表する近代建築20選のひとつに選定されました。翌年の2000年には、ブラジルで開催された DOCOMOMO 世界大会の場で、広く世界へも伝えられております。また、その後、本会が主催者となって開催したふたつの展覧会、「文化遺産としてのモダニズム建築 DOCOMOMO20 選展」（2000年1月26日～3月26日、神奈川県立近代美術館）、「文化遺産としてのモダニズム建築 DOCOMOMO100 選展」（2005年3月12日～5月8日、松下電工汐留ミュージアム）でも、広く建築内外に紹介させていただいております。さらに、回顧展として開催された「吉阪隆正展 - 頭と手」（2004年12月3日～27日、日本建築学会建築博物館・現在巡回中）においても、新たに200名を越す学生たちの手によって制作された巨大な粘土模型によって、吉阪の代表作品として大きく紹介されました。

こうした中、その建築的な価値については、十分にご承知のことと拝察いたしますが、過日宿泊棟の一部を取り壊し、新たな建物が建設されました。これは、大学セミナーハウスの運営上の観点からのご決断かとは思いますが、ここで改めて本建築に備わる歴史的な価値についてご理解をいただき、今後、その価値の保存について、慎重にご検討下さいますようお願い申し上げます。

この建物の歴史的価値は、次のようにまとめることができます。

#### 1. 吉阪隆正の設計による代表作品であること

ご承知のように、建築家・吉阪隆正（1917～1980年）は、戦後、第1回のフランス政府給付留学生としてパリへと渡り、20世紀を代表する世界的な建築家であるル・コルビュジエ（1887～1965年）のアトリエに学び、帰国後、母校の早稲田大学で長く建築教育に携わる一方、精力的な建築設計活動を続けた著名な建築家でした。

本建築は、その吉阪が構想から一貫して手がけた最大規模の仕事であり、彼の建築思想の集大成となるものです。そこには、吉阪が追求した「不連続統一体」、「有形学」といった独自の建築思想がたしかな形となって実現されています。また、これほどまとまったスケールと現在まで良いコンディションで使われている建築は数少なく、吉阪の現存する作品としても大変貴重なものです。

## 2．施設自体が戦後日本の文化史にとって歴史的な存在であること

本建築は、また、1960年代という激動の時代の中、大学の大衆化による教員と学生との対話や交流の希薄化に危惧を抱いた有志の手によって発案され、大学の枠組みを超えた共同利用のセミナー施設として、日本で最初に建設されたものであり、すでに戦後日本の文化史にとってもなくてはならない存在になっています。「セミナー・ハウス」という名称自体、本建築によってはじめて生まれた造語でした。その高い理念は、「Plain living and high thinking」（生活は簡素に、思想は高潔に）という標語へと結晶し、多くの学生が、この建物に接することによって、ごく自然にその精神を学んできました。その意味で、建物自体が、そうした戦後文化史の貴重な舞台でもあったのです。多くの戦後の建築が取り壊されていく中で、本建築は、戦後精神を今に伝える貴重な場所としての意味を有しています。

## 3．建築作品としての価値

この建物が建設された1960年代は、近代建築が急速に発展した工業化の流れに巻き込まれてやせ細り、行き詰まりを見せ始めた時代でした。そうした中、吉阪は、世界各地の集落を巡るフィールドワークから得た知見を元に、建築のもつ物質的な存在感と手に触れる細部のデザインに力を注ぎ、一方で、人が集まる場所はどのようにあるべきか、という原理的な空間の組み立てを試みようとしてきました。本建築は、そうした近代建築の新たな可能性を切り開こうとした吉阪の考え方が実現されており、DOCOMOMOの選定建築物のみならず、日本の近代建築の中で独自の存在価値をもっていると言えます。

以上のことから、本建築は、さまざまな価値を有する貴重な建築文化遺産と考えられます。つきましては、今後も、引き続き建設当初に定められた創設の意図と設計主旨をご理解いただき、良好な状態での保存活用の方途を見出し、このかけがえのない建物を後世へと継承されますよう、格別のご配慮を賜りたく、関係資料を添えて、ここにお願ひ申し上げる次第です。最後に、もし求められましたら、本会としても、この建物の保存活用について、建築の専門家という立場から、助言させていただく用意のあることを申し添えます。

敬具